

茶摘みの思い出とともに

東彼杵町立彼杵中学校二年 谷口 遥祐

僕が住んでいる町は県内でも屈指のお茶の産地です。四月下旬から五月にかけて、町内の至る所で茶摘みの光景を目にすることができま

す。僕の通った小学校には学校茶園があります。新茶の季節になると、毎年、授業の一環として茶摘みの体験をしていました。この茶摘みは、三世代及び地域の方々との交流の場として、毎年楽しみにしている行事でした。

美しい黄緑の茶葉をつけた、腰丈ほどのお茶の木を両側から挟むように生徒が立ち並びます。ざるを片手に持ち、新しい茶葉を、親指と人差し指の間にやさしく挟んで、一枚一枚丁寧に摘み取ります。最初はどこから摘み取っているのかわからずに、古い葉を摘んでしまったり、あちこち摘んでいるうちに、たぐさんの摘み残しをつくったりしたものです。また、摘んでも摘んでも、なかなか終わりが



見えなくて、大変な作業だったのを思い出します。

しかし、この作業の後に、茶畑でしか味あうことのできない時間を、毎年楽しみにしていました。それは地元道の駅で作られたお茶の葉をかたどった回転焼き、茶々焼きを食べる時です。

茶々焼きのあんこは、地元の彼杵茶を練り込んだ薄緑色のあんです。ほんのりと甘い茶々焼きを食べると、茶摘みの疲

れも忘れさせてくれるようで、初めて食べたときから、とりこになりました。それ以来、茶摘みの後にみんなが食べる茶々焼きは僕にとって格別なものとなりました。

中学生になっただ今でも、無性に茶々焼きが食べたくなります。いつ食べても、きと同じ味なのかもしれませぬ。しかし、茶摘みの作業後に、茶畑でみんなが食べた茶々焼きは、僕にとって忘れられない味なのです。